

学 位 論 文 審 査 要 旨 公開審査日 2014 年 12 月 24 日(水)

報告番号：甲 第 1646 号	氏名： 中山ゆみ	
論文審査 担当者	主査 教授 池田 徳彦 印	副査 教授 福武 勝幸 印
		副査 教授 松本 哲哉 印
<p>審査論文の題目： Evaluation of the Human Papillomavirus mRNA test for the detection of cervical lesions in Japan (日本における頸部病変の検出のためのヒトパピローマウイルス mRNA の評価)</p> <p>著 者： Yumi Nakayama, Masatoshi Yamada, Aatsuchi Kurata, Hisami Kiseki, Keiichi Isaka, Masahiko Kuroda</p> <p>掲載誌： European Journal of Gynecological Oncology (in press, 2014)</p>		
<p>論文要旨：</p> <p>子宮頸管病変をスクリーニングするために、パパニコロー (Pap) 試験と共にヒトパピローマウイルス (HPV) DNA テストが広く使用されている。HPV テストは感度が良好な反面、一過性の感染のみでも陽性となるため特異度は低いとされる。本研究では HPV mRNA の発現を検出する Gen-Probe APTIMA HPV Assay を使用して評価を行い、HPV DNA テストとの比較を行った。</p> <p>410 人の女性から回収した液体子宮頸管 Pap サンプルについて、APTIMA テスト、Qiagen Hybrid Capture 2 HPV DNA (HC2) Test、および AMPLICOR HPV Test を用いて診断率の評価を行った。ハイリスク HPV の検出に対する感度および特異度は APTIMA test が各々 85.6%、99.2%、HC2 test が 94.1%、98.4%、AMPLICOR test が 90.2%、95.7% であった。子宮頸管病変は重症化するに従い、これらの検査法の陽性率は同様の上昇を示した。扁平上皮病変 (SIL) の検出に関する感度および特異度は、APTIMA test が 91.2%、84.2%、HC2 test が 94.5%、80.4%、AMPLICOR test が 87.9%、78.2% であった。APTIMA test はハイリスク HPV の検出について高感度であるとともに特異度が有意に優れていた。このため、APTIMA test が偽陽性を低減し、効率的な子宮頸部スクリーニングが可能となることが示唆された。</p> <p>審査過程：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 本研究の背景、目的、意義、先行研究、倫理的事項に関する説明がなされた。 2. 検査の原理、検体採取、サンプルの解析方法に関し説明がなされた。 3. 検診結果の統計処理、gold standard に関する質疑応答がなされた。 4. 3 種類の検査法の感度、特異度の優劣や結果の差異に関する質疑応答がなされた。 5. APTIMA と他の 2 種の検査の感度の同等性に関する考察がなされた。 6. 本研究結果をふまえた今後の臨床応用についての展望が述べられた。 <p>価値判定：</p> <p>本研究は子宮頸部病変のスクリーニングにおいて HPV mRNA を検出する検査法が有用であることを明らかにし、特に特異度が優れていることを証明したものである。前向きに従来法と診断率を比較した解析結果より、将来的に対策型検診や早期診断に応用できる可能性も示唆され、よって学位論文としての価値を認める。</p>		